

# 日本の実業家の伝統をつくった 渋沢栄一

実業は単なる金儲けではない。「論語と算盤」という言葉で表される、  
日本の実業家の理想のモデルをつくったのが渋沢栄一だった。

## ● 道徳心を培った少年時代

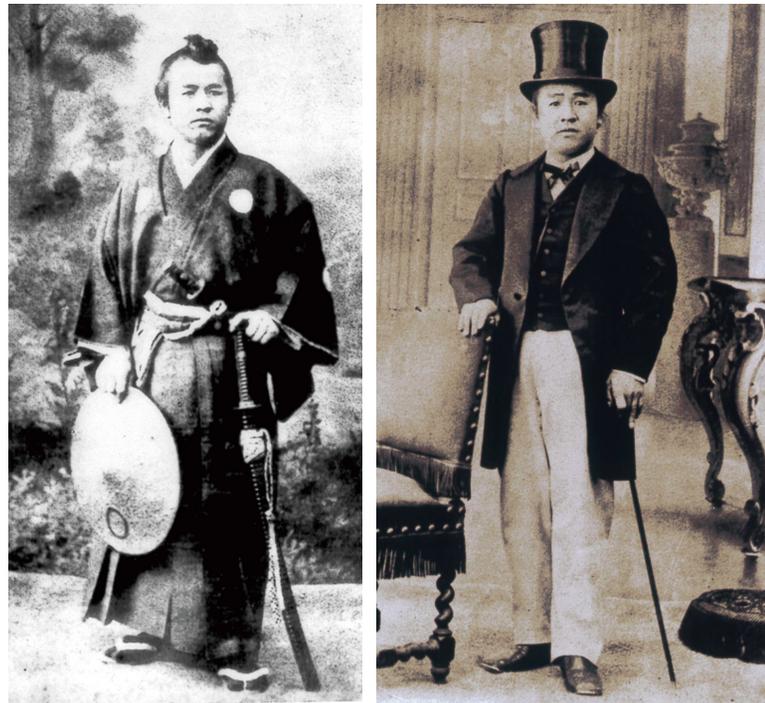
渋沢栄一は、明治から昭和にかけて日本の経済界の指導者として活躍した実業家です。

渋沢は、1840（天保11）年、今の埼玉県深谷市の農家に生まれました。5歳になると、学問の素養のあった父親から漢文の書物の素読を教わり、1年あまりで中国の古典である小学・大学・中庸・論語を読み進みました。8歳ごろからは漢学者に師事し、聖人、賢人の言行を記した多数の書物を学び、教養と道徳心の基礎を培いました。

## ● 商人が誇りを持つ国に

1864（文久4）年には武士の身分を得て、のちに15代将軍となる一橋慶喜に仕えました。1867（慶応3）年、幕府が派遣したパリ万国博覧会使節団の一員としてヨーロッパにわたり、フランス、イギリスなどを視察しました。

そこで発見したことの一つは、銀行家が陸軍将校と対等に話していることでした。日本で言えば、銀行家にあたるのは商人で、陸軍将校は身分の高い武士です。武士のなかには、金儲けを卑しいものとみて、商人と同席することをはばかる風潮がありました。渋沢はこれからの日本は、商人が誇りをもって商売するようにならなければいけないと思いました。



渋沢栄一（1840～1931）上の2枚の写真のうち左は武士の服装、右は西洋紳士の服装です。誇り高い武士・渋沢が、西洋視察中に心境の変化を起こし、近代的な実業家に生まれ変わろうと決心したことを象徴しているかのようです。（東京都・渋沢史料館蔵）

15

## ● 株式会社の必要性を痛感

さらに渋沢がヨーロッパで学んだのは、株式会社の必要性でした。株式会社とは多くの人からお金を集め、それを元手に事業をする仕組みです。一人から集める金額は少なくとも、それがまとまれば大きな金額になります。株式会社は国の産業を盛んにするとともに、人々の生活を豊かにするのです。

渋沢は「わが国が西欧諸国と対等に交際していくには、国を富ますことが必要だ。そのためには商工業を

25

近代化し、多くの人から資金を集める株式会社をつくらなければならない」と考えました。

帰国後は新政府に召され大蔵省（現財務省）に勤めるなどした後、1873（明治6）年、第一国立銀行の創設にかかわり、そこで手腕を発揮します。さらに東京ガス、帝国ホテル、麒麟ビールなど約500の株式会社の創設や運営にかかわりました。

### ●「論語と算盤」の考え

10 沢は、実業家の仕事を単なる金儲けとは考えませんでした。人としての信義を重んじる道徳心を実業家に求め、彼らに論語の教えを語りました。そのような実業家こそが、一身一代を繁栄させると同時に、日本全体を豊かにするとの考えからでした。

15 沢のこうした思想は「論語と算盤」と呼ばれました。信用を大事にし、道徳（論



沢栄一の生家  
(東京都・沢史料館蔵)



『論語と算盤』沢栄一・著  
(東京都・沢史料館蔵)

語）と経済（算盤）を統一し、公共心を重んじる日本の実業家の伝統がつけられました。

沢自身も事業活動で生まれた富の一部を社会に還元すべきだと考えました。東京養育院という弱者を救済する施設など、沢がかかわった社会・公共団体は600に上ります。

また栄一の孫、沢敬三も第一銀行副頭取や日銀総裁、大蔵大臣などをつとめ、祖父同様日本の経済界を指導しましたが、自ら民俗学を学んだ学者でもありました。沢敬三は、民俗資料を求めて全国を回り「旅する巨人」と言われた宮本常一ら多くの民俗学者を物心両面で援助しました。沢栄一の考え方を引き継いだといえます。



第一国立銀行（現みずほ銀行） 沢栄一が創設にかかわるとともに、総監役となりました。（東京都・沢史料館蔵）